

富士通

既存システムとの融合で通信手段を革新 コミュニケーションの充実を図る

情報システムはオペレーションの習熟、システムの安定稼働という点から、新規導入よりも既存のものを利用して段階的に導入したほうが、トータルコストは抑制され、稼働までの期間が短縮される場合も多い。愛知県津島市の中核病院である津島市民病院では富士通のマイグレーションモデルを使い、既存システムを活かしたIP電話システムを導入した。

津島市周辺の地域住民の健康を支える津島市民病院は、「心かよ医療を」の基本理念のもと、「正しく確実な診断をし」「安全で効率的な治療を行い」「良い結果を得る」ことを目指し、日々の診療や治療を行っている。

1997年から2006年にかけて実施した病院全体の増改築に伴い、新しい診療科や施設の増設、中部地区初の定位放射線治療機器(サイバーナイフ)導入、病床数の増床といった改革も進行。それに合わせて医師や医療スタッフも増員した。

津島市民病院では以前、医師は内線用PHSと院外連絡用クイックキャスト(旧ポケットベル)の2つを利用してスタッフ間のコミュニケーションをとっていた。そのクイックキャストのサービスが、2007年3月で停止されることになり、新しい、院外の医師への通信手段の確保が急務となった。

津島市民病院院長(兼看護専門学校長)松崎安孝氏は同病院のコミュニケーションシステムの刷新の必要性について次のように話す。「当院を利用される患者様、地域住民の方々、そして

当院の医療スタッフ同士の間で心が通いあうためには、コミュニケーションが最も重要だと考えています。スタッフを増やしてチーム医療を進めれば、その重要性はさらに高まります。そのコミュニケーションを充実させるために必要なのが、通信という手段です。我々は、クイックキャストのサービス停止を機会に、新しい通信手段への革新を行うべき時期が来たのだと判断しました」

新システムの課題とその対応

とはいえ、急いで新システムを導入し現場の混乱をまねくことは避けなかった。病院の現場で何か支障があれば患者の生命まで脅かすことにもなるからだ。また、現場からはシステムの活用について次のような意見もあった。

同病院診療局長(兼外科部長兼手術部長)神谷里明氏は「医師は元々、24時間365日フル待機の職業です。いつ呼び出されても別にストレスにはなりません。逆に、すぐに連絡が取れないほうが耐えられないですね。たとえ離れた場所にいっても、現場にいる看護師や技師、同僚の医師からの連絡が迅速かつ正確に受けられること、すぐに的確な指示を出せる



津島市民病院 院長(兼看護専門学校長) 松崎 安孝 氏



津島市民病院 診療局長(兼外科部長兼手術部長) 神谷 里明 氏



津島市民病院 事務局医事課 情報管理グループ統括主任 伊藤 邦彦 氏



津島市民病院 看護局 看護士 仲尾 麻美 氏

ことが重要です。」

また、同病院看護局看護士の仲尾麻美氏は、「クイックキャストだと、医師に本当に連絡がついたかどうかはコールバックがあるまでわかりません。それを待つ間がとても不安でした。このようなことが解消できれば良いと常日頃思っていました」さらに、情報システムを管理する立場から、同病院事務局医事課情報管理グループの統括主任伊藤邦彦氏は「導入前に調査したところ、コミュニケーション環境を全く新規に構築するとしたら、すでに建物が完成してしまっているの、機器の設置工事等の難易度が非常に高くなることがわかりました」

そこで着目されたのが、既存の電話環境を利用しながら、SIP対応IP電話を部門単位で段階的に導入できる富士通の提供する「マイグレーションモデル」と、1台で内線電話・携帯電話の2役をこなすFOMA®デュアル端末を使った「無線LANデュアル端末連携モデル」だった。

富士通の「マイグレーションモデル」は、既存の音声システムやネットワーク環境を利用し、低コスト・短期間で新しいIP電話システムを段階的に導入できるのが特長だ。津島市民病院では、診療内容や検査結果などの伝達を目的として、すでに富士通のオーダーリングシステムが導入されており、インテリジェントなネットワークは構築済みであっ

た。そのネットワークに既存の音声システムを統合することにより、医師とスタッフのシームレスなコミュニケーション環境を構築した。

効率化されたコミュニケーション

その効果は次のようなものだ。

1. 「無線LANデュアル端末連携モデル」を導入し、コールバックを待つポケットベルとは違い、院外にいる医師に状況を直接報告し指示を受けられるようになった。
 2. 既存の音声システムを活用してSIP対応IP電話を段階的に導入できる「マイグレーションモデル」と、既存のデータネットワークを融合することにより、医師へのシームレスなコミュニケーション環境の構築を、低コストかつ短期間で実現した。
 3. 無線LAN環境の構築では綿密なエリア設計、およびアクセスポイントの電波特性や電波到達範囲の向上によって、他社に比べてアクセスポイント数を約3分の1に低減し、アクセスポイントの設置を廊下に限定、美観と音声品質の双方を同時に満足させた。
 4. 無線LANデュアル端末を導入したことにより院外、院内でもスタッフが効率よいコミュニケーションができるようになった。
- また、現在は相手の場所に応じて外線と内線の番号を使い分けているが、

富士通では、津島市民病院様に導入いただいたような最新のソリューションを広く知っていただくため、毎年「富士通フォーラム」と銘打ち展示会を開催しております。多くのセミナーや展示デモをご用意し、経営課題の解決や現場改善に役立つ商品・ソリューションを具体的にご提案させていただきます。貴社の新たなビジネス展開に必ずやお役に立つと確信しております。是非ご来場をお待ちしております。

【日程】

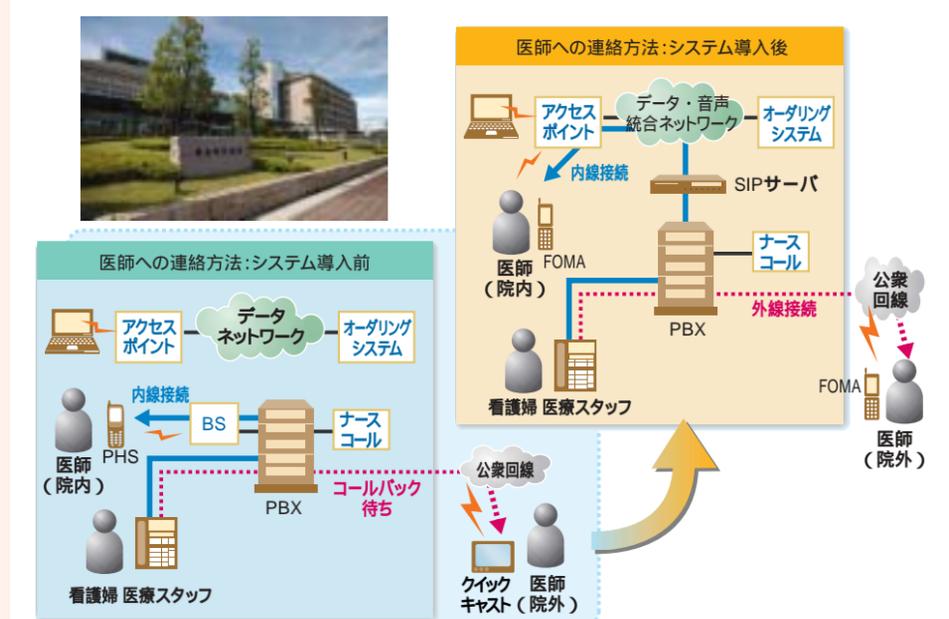
東京
5月17日(木) 18日(金) 東京国際フォーラム 〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-5-1
名古屋
7月19日(木) 20日(金) 名古屋国際会議場 〒456-0036 名古屋市熱田区熱田西町1-1
大阪
7月25日(水) 26日(木) 大阪国際会議場 〒530-0005 大阪市北区中之島5-3-51

「無線LANデュアル端末連携モデル」は内線・外線を自動的に切り替える機能も備えており、この機能を利用すれば、1つの番号に電話をかけるだけで、相手が院内にいれば自動的に内線電話として、院外にいれば外線(携帯電話)として接続されるようになる。加えて、このシステムの無線通信による医療機器への影響が少ないことも実証されている。

富士通ではこの実績でみるように、医療の現場に最適なコミュニケーションシステムを提供することで、業務支援をしていきたいと考えている。

お問い合わせ先
富士通株式会社
サービスビジネス本部
ネットワークビジネス推進統括部
ネットワークサービス推進部
<http://jp.fujitsu.com/telecom/>
tel: 03-6424-6266

図 津島市民病院の新コミュニケーションシステム



導入した製品・サービス
オフィスノバージョンモデル:「マイグレーションモデル」/「無線LANデュアル端末連携モデル」
製品: SIPサーバ/IP-PBX IP Pathfinder RM10S、FOMA®デュアル端末、無線アクセスポイント(AP208)など
規模: FOMA75台、アクセスポイント120台

・記載の会社名、製品名、名称等の固有名称は各社の商標または登録商標です。
・「FOMA/フォーマ」は(株)NTTドコモの登録商標です。